

《巻頭エッセイ》

むろまちのうたはあたたかい

武井和人（たけい・かずと）

一、はじめに

わたくしは、今でこそ室町時代の典籍（就中和歌）をこよなく愛してやまぬが、学部時代はナイーブな（新古今オタク）でしかなかった。大学院に進んで研究テーマを一条兼良に変更することになるのだが、思ひ返してみると、研究テーマ・時代の変更の遠因の一つに、『岩波古語辞典』のある記述があったやうだ。まづはここらあたりから話を始めてみようと思ふ。

二、『岩波古語辞典』と「むろまち」

『岩波古語辞典』が刊行されたのは一九七四年二月二五日。学部二年の冬であつた。丁度年末年始の休みであつたこともあつて、暇に任せて、購入したばかりのこの辞書を、気の向

くまま拾ひ読みをしてゐた。そこには、それまで見て来た学習用小型古語辞典とは全く異なり、見たことも聞いたこともないやうな中世の文献（特に室町期のそれ）があつた（巻頭に置かれた「出典要覧」は、一介の学部生にとつて半ば衝撃だつた）。後に、このありやうは、中世を担当した佐竹昭広ならではかなはぬことを知ることになるのだが、視野の狭い学部生、知る由もない。

そんな《岩波古語体験》の中でも、以下の記述には、ほとほと驚倒させられた。まづ語釈。

もの・し【物し】【寸変】《モノは動作・行為・状態そのものを個個に具体的に表現せず、一般的な動作・行為・状態として指す語》居る、行く、来る、言う、食うなどの動作を直接さす語を用いず、婉曲に一般的な動作として把握し表現するに使う語。

ここまですらば、見慣れた古語辞典とさまで径庭はない。

問題は用例として最後に掲出されてゐるもの。

「腹中騒ぎ——したき（便所ニ行キタイ）まま、……・すると思ひ、夢覚めき」〈多聞院日記四三〉

まさか、「ものす」が「脱糞する」といふ意味に使はれてゐようとは！ のみならず、日記に夢の中の寝糞の記事を書く人間がゐようとは……

初学者なりではあるものの、この記事を拾ひあげた佐竹の学識・センスにほとほと敬服したものである。その気持ちは、いまに至るまでなんら変はらない。

これ以来、『多聞院日記』は、忘れ難い文献となつた（だからといって、『多聞院日記』を追尋する、などといふことは、たえてしなかつたが……）。つまり、わたくしの「むろまち」への chichrone は、『多聞院日記』だつたのである。

二、『多聞院日記』と英俊

『岩波古語辞典』が用例として引く『多聞院日記』巻四三が実は少々曲者。この巻は、別記とでもいふべきものであり、著者・英俊（一五一八—一五九六）自身が「夢幻記」と名付ける通り、夢の記事の宝庫である（『多聞院日記』それ自体にも夢の記事はまことに多い）。従つて、中世における夢研究では「定番」史料となつてゐる。当該記事の全文を以下に掲出してみる。

一 或人夢二、錢千貫ヒロイ悦テ持カヘルトテ、腹中サワキ

物シタキマ、ワキニ錢ヲヲロシテモノスルト思ヒ夢サ
メキ、見ニ錢ハナクテ物ハシタ、カニアリシト、夢ノア
フコトモアワヌ事モ、

（辻善之助編『多聞院日記』第五卷・四一頁上段）
後に記事の全文を知つた時、「どうせなら全て引いておいてくれればよかつたのに」と、少しばかり『岩波古語辞典』を恨んだものである（ちなみに、後に出た『時代別国語大辞典（室町編五）』はほぼ全文を引いてゐる）。何故といふに、「正夢」だつたのだから。

ここでの英俊の言説は、岡見正雄がかの「室町ごろ」でいふところの「呑気な時代であつたと思う（中略）大様な、はがらかな、生々たるものが中世心としてあつた」時代相と、紛れもなく通底してゐる。

こんな英俊なのではあるが、『多聞院日記』には、和歌も相当数収められてゐる。

四、英俊の和歌

英俊の和歌に関しては、次の井上宗雄の言につくにしくはない。井上曰、

多聞院日記には教訓歌や狂歌の類が随所に散見して興味深い。（中略）しかし英俊はいわゆる正統な歌を詠まなかつたのではなく、独詠歌・贈答歌もみえるし、また連歌にも関心はあつて、（天文）八年八月肖柏門の柳江らを泊め、

発句を送ったりした。(中略) 英俊はもとより当時のインテリであるが、文芸の方には高い識見やセンスを持っていた訳ではない。その故にむしろ僧侶の、文芸に対する平均的なとらえ方を、その日記から見出せる点で貴重である。

(井上『中世歌壇史の研究 室町後期』四〇六～四〇七頁) ここでは、井上がいふ所の「正統な和歌」を見て行きたい。

『多聞院日記』を和歌史の資料として扱はうとする場合、実に至便な「工具書」(この術語、中国学の方では一般的なものであるが、日本古典研究においてはまづ聞かない。しかし代替しうる適切な術語がある訳ではない「参考文献」では微妙にずれる)。今後取り入れられるべきかと考へ、あへてここで使用してみた)が存する。

『多聞院日記』は、戦前、辻善之助・高柳光壽・桑田忠親・桃裕行・永島福太郎といった、今となつて見るとちよつと目の眩むやうな史学者たちによつて校訂された五冊本が刊行され(三教書院、一九三五～一九三九)、戦後、そのままの形で続史料大成に収められた(臨川書店、一九七八)。一方、角川書店も一九六七年、五冊本を復刊したのだが、新たに、杉山博編になる『索引』が追加され、六冊仕立てとなつてゐる。この〈杉山索引〉が、実に至便なのである。といふのも、巻末に付された「和歌(狂歌・朗詠を含む)」索引は、ありがちな初旬索引ではなく、和歌一首全体を本文の表記に従つて(例へば、カタカナ書のものとはカタカナ書で)掲出してくれてゐ

て、簡単に『多聞院日記』全体の和歌を通覧することが出来るのである。なほこのあたりの事情については、早く、福田秀一「中世記録類と文学」(福田『中世文学論考』(明治書院、一九七五・五)所収)に「多聞院日記」活用法とあはせて詳しい指摘があり、ここで今更喋々と述べる必要などなかつたことではあるが……

わたくしも杉山の学恩に浴しつつ、『多聞院日記』の和歌を早速読み進めてみた。どこまでが狂歌でどこからが正統な和歌か、なかなか判別がつかないものが確かに存するものの、心惹かれたある一首を読んでみようと思ふ。

廿八日、(中略) 發心院へ琳禪房講問ノ談義沙汰了、御物語、今日寶光院語、去年ノ今日ハ宗圓房京へ爲療治上洛之日ナレバ、思出シテ落涙ノアマリ、哥ヲよミテ母之方へ遣了ト、トアル時我も、

ことの葉におとろかされて今更に

忘ぬ姿おもかけにたつ

(『多聞院日記』天文一三年二月二十八日条(第一冊・三四七頁下段))

『多聞院日記』によれば、宗円房が長教房・春堯房らと同時病を得た(流行性の感染症か)のはこの前年、天文一二年(一五四三)二月一日のことであつた。宗円房は、恐らく二月一〇日前後に京都に療治に赴いた。しかし、病は癒えず、一六日、奈良に戻つた。そして英俊の本復祈願も空しく、二八日「九之時分」他界した。二二歳の若さであつた。五月

三日、白毫寺において葬送がなされ、「以外群集」であつた由を『多聞院日記』は伝へる。

従つて、この英俊詠は、宗円房一周忌に際しての英俊の独詠歌と解することが出来る。

ここでわたくしが特に心惹かれたのは、「おもかけにたつ」といふ措辞である。

そのずばりの先行する用例ならば、たとへば、

目かるとも思ほえなくに忘らるる時しなれば面影にたつ
（『伊勢物語』八六（第四六段））

いとどしくおもかけにたつこよひかな月をみよともちぎらざりしに
（二度本『金葉集』恋下・四二四、内大臣）

などをあげることが出来る。「おもかけそたつ」で良いのならば、これはもうなんといつても、

かきやりしそのくろかみのすぢごとにうちふすほどは面かけぞたつ
（『新古今集』恋五・一三九〇、定家）

が想起される。

しかし一方で、〈杉山索引〉による限り、『多聞院日記』に、『古今』『伊勢』『源氏』『新古今』といった、いはば堂々たる「歌書」の名を一切見出すことが出来ない。むろん、だからといって、英俊がこれら「歌書」を一度も読んだことはない、などとはいへまいが、井上の説く通り、「文芸の方には高い識見やセンスを持っていた訳ではない」ことを、このやうな形で再確認するのが自然である。換言すれば、英俊の歌ことばは、恐らくは先行する歌書を踏まへてのものではなく、自づから発露

してしまつたものであらう、といつても良い。

といふことになる。英俊は、王朝文化にとどに濡れそぼつたかの如きかかる表現を、知らず知らずの内に己がものと醸成し得てゐたと見る他ない（なほ、金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫蔵『松雲公採集遺編類纂』（一六・〇三一〇〇二）第九一所収「南都興福寺々中書籍目録」内「興福寺々内多聞院書籍之覚」に、多聞院蔵の典籍の名が、数は少ないながら記載されてゐる。その中でのだだ一つの歌書が『歌枕名寄』（五冊／但筆者不知）とある）であることをどう理解したらよいか、なかなか悩ましい問題ではある。

このやうに、文献といふソリッドな存在から、いはば溶け出した形で、さまざま王朝和歌表現が、むろまちびとの中にあり続け、個々人の内で〈窯変〉してゐたであらう、その一端をここにしかと見る事が出来るよう。

ちなみに、英俊は十市氏の出と伝へる。ここ廿年ほどのわたくしの十市遠忠（一四九七―一五四五）への沈潜も、どこかで英俊が導いてゐたのか、などと余計な妄想をしてしまふのである。

五、〈都鄙逆転〉

英俊は、『多聞院日記』の記事による限り、和歌に対して特別な思ひ入れがあつたやうには見えない。かりに英俊が生涯一首の和歌をものしなかつたとしても、英俊の処世にとつて、

さまで支障は生じなかつたであらう。

しかし、和歌がさまざま空間で、重きをなすツールとして処せられてゐたことも、また事実である。その一つの象徴的な事例を、『天文雜記』より見てみたい。

『天文雜記』は、孤本である吉田幸一蔵本が『古典文庫』六二八（一九九九）において活字化された。わたくし自身にとつて到底扱ひえない類の文献であり、いまだ一読者たるにとどまつてゐるが、刊行後、二〇年余りたつたにもかかはらず、古典研究において大いに活用されてゐる、とは到底いへない。なんとも惜しいことである。

ここで見てみたいのは、巻五に収められる「青侍文盲物語事」（37）。以下の引用においては、古典文庫の本文に適宜句読点、濁点、括弧、改行、注記等を施した。

中むかし、ある公家のさぶらい、弁舌すぐれたるが、主人用の事ありて、大内介（＝大内政弘）のもとへつかはしけり。同朋ども、色／＼のはなむけし、ねんごろにいとまごひしていわく、「西国武家の人々、近代哥道にほまれある事、公家にまされり。京家のつかいなりとて、やさしくもてなし侍らんにハ、いとはれがましかるべし。よろづにこゝろをくばり、さりぬべき口上なども習礼して、主君にも面目あるやうにはからいたまふ」と、くれぐれ申ければ、此青さぶらひ、御申の段、いかにも深切のいたりなり。されどたとへいかなる晴の座へのぞミたりとも、いかでかしそんじ侍るべき。心やすくおもひたまふ

べきよし、うけがいつ、まかりけるが、程なくかの国につきて、「かく」と申入侍るに、「扱ふ京がたの御つかひ、御太儀にはべる」とて、家臣陶のなにがし出あひて、口上のおもむき、早速主君に達しけり。大内やがて此使に对面あり。「遠方の使客、珍重なり。まづ休足ありてしかるべし」と、いんぎんのふるまひなれば、家従もござりて此青さぶらいを奔走しけり。使も文盲にハはべれど、口き、なるものにて、いかなる貴人をも一口にのむほどの器量なれば、なじかハもだしはべるべき。昼夜とともに利口をばはきちらしたれば、一家のともがら閉口せり。二三日ありて後、陶のなにがしといふもの、宿所へ使客をまねきて、馳走をつくして後、都鄙の雑談の次に、「近年諸国の武家、敷嶋の道に心をよせ給事、もつてのほか也。乱世のきやうがいハ、いとやさしくも聞え侍れど、いかでか京家の公達におよばんや。まことにあさ夕帝闕へつかうまつらせ給へバ、御秀哥もおほくはべるべし。さて／＼おそれおほき事にもはべれど、せめてハ其御座席を、物のひまよりなりとも拝見仕りたく思ひ奉る。扱御会の哥は、即題にてあそばされけるか、そも／＼又兼題をくだしめ給ひてあそばされけるか」と申けるに、彼さぶらい、「この両条、いさ、か心えがたく侍れど、さればとて、やん事なき人にその子細を問かへさんもおこがましく覚えければ、「唯よきほどに返答をいたすべし」と思ひて、「御仰せなれど、公家の御うたにハ、そくたい（＝

燭台)にかぎらず。おほくハ日中にあそばさるゝ事に侍れバ、らうそくも用ゐるはべらず。日暮てハ燭台を用ゐるゝ事勿論なり。また兼題(「見台」ノコト歟)とて、きわまれる法もなし。御つくへにてもよませたまひ、ぶんこのうえにてもあそばさるゝ事なり。武家の人々さまハしらず、公家の哥にハ、何を法としてせはき掟も侍らず、こと葉ハ、はまの真砂なれば、ミぬもろこしの山のあなたまでをよミ給ふ事、行住座臥のもてあそび也」といひければ(以下略)(古典文庫本・一三一―一三四頁)

紙幅の都合で、ここまでの引用にとどめる。後文では、大内方の失笑を隠さざるをえない苦労が書き留められてゐる。もとよりこれは、この半可通の極みの「青侍」においてしもこそおきてしまつた(即ち、特殊・個別の事例と解すべき)《都鄙逆転》と見るべきではあるものの、そのかみの「都鄙」における文化水準のありやうを如実に、そして、雄弁に物語る咄とはいへよう。

六、いたりいたりて

先に「和歌表現」が「文献といふソリッドな存在から、いはば溶け出した」云々と述べたが、最後に、いま一つの現れを書き記しておく。

ジョアン・ツズ・ロドリゲスの手になる『日本大文典』、その一五丁表に、こんな歌を見出す(「希求法」の説明として、「も

がな」の用例としてあげたもの)。

(あはれただ憂き時つるる友もがな、

人の情は世にありし程。)[菅丞相の歌]

いま引用は、土井忠生訳注『日本大文典』(三省堂、一九五五・

三)を以てした(同書・六五頁)。

この歌を、ロドリゲスは「菅丞相」即ち道真詠として引いてゐるのである。土井「事項索引」(前掲書所収)によれば、『大文典』が道真詠を引くのはこの歌のみ。「希求法」解説の一環として「もがな」の用例を引くのならば、もつと堂々とした用例があまたあるにもかかわらず、この「菅丞相の歌」を以て代表させてゐるところ、なにやらいはくありげではあるが、いまのわたくしはこれを解くすべを持たないのを遺憾とする。

(いつごろからかはしかとつきとめにくいものの、少なくとも)室町期以降、道真(天神)に仮託された家集・百首・小歌群が大量に生み出された。かつてその一端を自分なりに整理し報告したことがある(拙著『中世和歌の文献学的研究』)。ただその論、考へ違ひ、編集の誤り、釈文における誤読等、問題点が余りに多く、学界にご迷惑をかけしてしまつたことをお詫び申し上げねばならない。幸ひ、その後何人かの研究者が研究を進めて下さり、特に、安原真琴・渡辺麻里子『「妙法天神経」の和歌』(小峯和明『宝鏡寺蔵「妙法天神経」全注釈と研究』(笠間注釈叢刊三二))、笠間書院、二〇〇一・七)、及び同書所収「道真仮託歌集リスト」が出て、伝本の全体像が簡単に一覧出来るやうになり、かつ、拙稿の

誤りを多々訂正することが出来、研究が確実に次の段階に進んだと覚しい。

さて、この道真(天神)に仮託された百首歌の複数の系統の伝本に、この「菅丞相の歌」が見えるのである(それ以外の他出は分らない。乞教示)。^⑧系統(わたくしの分類では「己」)の唯一の伝本とされて来た、静嘉堂文庫蔵『瑠璃壺百首』(八二・三四・二五・二二)を底本として本文を示す。なほ、近時その伝存を知るを得たこの系統に属するいま一つの伝本、京都市歴史資料館蔵『瑠璃壺百首』(二〇箱・三九〇)と対校するに異同は存しない。

あはれ我うき今までの友そなきひとのなさけハよにあり
しほと(墨付第一丁裏)

本文は、他系統本もほぼ同文。ここで注目したいのは、上句における「菅丞相の歌」との微妙な本文の違いである。その本文相違を、異伝歌なるが故として片付けてしまふことも出来る(事実異伝歌には違ひないのだが)。しかしそのやうなそとづからの「処置」にとどまらず、この「異伝」がなにゆゑに生じたのか、といふ所まで考へたい。そもそも、ロドリゲス(あるいはロドリゲスにこの歌を伝へた「恐らく日本人の」某)が、この形の歌をどのやうにして知り得たのか、といった方が正しいかもしれない。

わたくしは、この本文の「混乱」は、書承時における誤写などといったことではなく、「口承」における「訛伝」と考へる。なほ妄想を膨らませれば、いまだ典籍とはなつてゐない道真

(天神)に仮託された歌歌のかたまり(もとより仮想的なそれ)から直接、ロドリゲスのもとに齎された、といふ可能性も考へてみたい。

いづれにせよ、道真(天神)に仮託されたこのやうなアブナイ歌が、恐らくは文献からではなく口承といふ回路を経て、イエズス会士の周辺にまで流れ着いてゐた。このことに、わたくしは胸うたるるのである。

七、をはりに

室町の和歌、そして和歌をとりまく環境は、見て来た如く、まことにあたたかい。それは、王朝和歌の心魂をしつかりと受け継ぎつつも、正統から異端まで多種多彩、貴賤緇素都鄙を超えて詠まれ尊ばれ、何より未開拓の資料・典籍がいまだ多数残される。

なればこそ(佐竹の『古語雑談』の言を借りていへば)かういひたいのだ。

イザウレむらまちのわかヲ読マウゾ

(埼玉大学名誉教授)